フィールドを共有する－Fieldnet がめざす超域的研究の創造力

石森大知（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／ジュニア・フェロー）

本発表の目的は、異なる分野の研究者が共同でフィールド調査を実施し、フィールドにおける具体的な経験の共有をとおして、たんに相互補完的という以上の新たなアイデアや研究成果が創造される可能性について考察をおこなう。

南太平洋のポリネシアに位置する島国ツバルは、「温暖化→海面上昇→沈没」という悲劇的シナリオを世界で最初に歩む国などと報じられ、注目を集めてきた。そのツバルを対象とする調査プロジェクト（環境省地球環境研究総合推進費「環礁上に成立する小島嶼国の地形変化と水資源変化に対する適応策に関する研究」および科学研究費補助金・新学術領域研究「サンゴ礁学－複合ストレス下の生態系と人の共生・共存未来戦略」）では、理系、工学系、文系の研究者が参画し、文理の枠を超えた調査・研究を実施してきた。一連の研究成果として、ツバルにおける浸水被害の主原因は、海面上昇に拠るというよりも、島の地形改変や人口急増にあることが明らかになっている。また、増え続ける廃棄物や屎尿・糞尿の不十分な処理による汚水の流出が有孔虫を激減・死滅させる汚染源となり、海岸侵食を助長していることも解明されつつある。すなわち、（温暖化などのグローバルな人為的ストレスというよりも）ツバルにおけるローカルな人為的ストレスが、いわゆるツバル問題（浸水被害や海岸侵食）の根幹にあることが明らかとなっている。そして、これらの研究成果は、異分野の研究者たちがフィールドで同一の現象を共有しつつ、異なるアプローチに基づいて収集・蓄積したデータを有機的に包括した結果である。

文理融合型の調査では、実際のフィールドにおける研究者間の相互作用がきわめて重要な意味をもつ。たとえば、2009 年 3 月のツバル調査の経験に基づき、「ミーティング」と「ともに歩く」という点を紹介する。「ミーティング」は、全員が参加して毎夕に実施されるものであり、基本的に日中は別行動する各調査班をつなぎあわせる役割を果たしている。そこでは、各班（サンゴ年輪班、有孔虫班、水資源班、海岸工学班、考古学班、文化人類学班）から 1 日の調査内容およびそこから考えうる仮説、そして翌日の調査予定などが報告された後で、各班入り乱れて活発な議論が交わされる。あるいは、異なる班同士のコラボレーションの提案なども、この「ミーティング」から生まれてくる。つぎに、「ともに歩く」についてである。異分野の研究者と実際にフィールドを「ともに歩く」ことは、きわめて示唆に富む経験であった。というのも、ある事象や現象に遭遇したとして、それに対するアプローチや理解の仕方が分野によって異なるため、新しい知見を獲得することが多々あったからである。それまで全く気にも留めなかった事象と、自らの研究との関連性を認識させられることもあった。たとえば、考古学者の方からは地形を読みとく肌理細かさや景観の歴史性、そして、それらが人々の移住史と密接に関係することを教えていただいた。また、地下の淡水層の状況と地上の人々の生活様式、あるいは海のサンゴ年輪の汚

れと陸の人々の経済生活が、表裏関係にあることも、従来は考えも及ばなかったことである。このように、異分野の研究者と「ともに歩くこと」は、世界をみる目が変わったといえるほど、新しい発見の連続であった。

私にとって、異分野の研究者のフィールドワークおよびその方法論を間近でみることは、いわば「異文化体験」であったといっても過言ではない。それは、１つには、文系／理系の学問的営みが、それぞれ定性的／定量的、質的／量的と形容される「差異」を有するものだからであろう。たしかに、これらのことを机上でいくら議論しても、なかなかこの差異は埋まるものではない。しかし、異なったもの同士が違いをそのままにしつつも、具体的な交流・交感を重ねることで、分野間の境界線が曖昧になるように思え、あるいはむしろ交差点も大きいと感じることもあった。それは、同一のフィールドに立ち、そして同一の現象をともに共有しながら、異分野の研究者間で展開される即時的かつ創発的な応答の連鎖・蓄積をとおして、醸成されてくるものであるといえる。

[参照文献]

Yamano, H., Kayanne, H., Yamaguchi, T., Kuwahara, Y., Yokoki, H., Shimazaki, H., and Chikamori, M.: Atoll island vulnerability to flooding and inundation revealed by historical reconstruction: Fongafale Islet, Funafuti Atoll, Tuvalu. Global and Planetary Change, 57, pp. 407-416, 2007.

山口徹・甲斐祐介「ピット耕地の景観史ーマーシャル諸島マジュロ環礁のジオ・アーケオロジー調査から」『社会人類学年報』33 号, pp.129-150, 2007。

桑原祐史・横木裕宗・佐藤大作・山野博哉・茅根創「ツバル国フナフチ環礁における沿岸域土地被覆変化の解析」『沿岸域学会誌』21 巻 2 号, pp.21-32 , 2008。